

先島諸島における津波伝承の象徴性

—石垣島・宮古島の津波石と人魚譚を中心に—

中村 純子

はじめに

- §1. 先島諸島の津波と研究概説
- §2. 石垣島と宮古島の津波モニュメント
- §3. 津波や人魚にまつわる伝承分析
- §4. 津波の象徴性と伝承の可能性

おわりに

梗概

南西諸島における津波伝承は、1771年明和大津波に由来するものが多い。とりわけ宮古島、石垣島で被害が大きく、津波石等の津波モニュメントと比例し、民話に関わるものが多い。民話では人魚と津波の伝承が顕著で、海神の遣いとされる人魚を食した罰や助けた恩といった意味付けがなされる。津波伝承は様々な形で伝播・変容しつつ、海神の乗物とされたザン（ジュゴン）が人魚を媒介として津波とリンクし、人魚は津波の象徴になっている。背景として竜宮の海神が起こす津波、海底異界が示される。また、新たな伝承活動として歌や絵本による啓蒙、民話編纂、地域興しやツアーの語りなどに可能性が見出せる。

●キーワード：津波伝承、先島諸島、明和大津波、象徴性、人魚、海神

はじめに

日本は過去から津波被害が絶えず、南西諸島においても地震と津波が多く生じている。1771年の明和大津波では南西諸島全体で約12,000人が犠牲となった。とりわけ石垣島と宮古島で被害が大きく、民話等の津波伝承も多く存在する。なかでも人魚と津波に関わる伝承が多く、先島諸島で特異な印象を与えるが、こうした津波伝承が象徴するものとは何か、本論は津波モニュメントや民話・神話・歌謡等の伝承から分析するものである。

本論執筆にあたり、2023年9月末に石垣島調査、10月下旬から11月上旬に宮古島調査を行い、津波モニュメントの視察、博物館の展示調査、ツアー等での伝承調査、市役所等で

の資料収集および関係者への聞き取り、文献資料収集を行った。なお、添付の資料写真はともに筆者の調査時に撮影したものである。

第1章.先島諸島の津波と研究概説

1-1 地理的概要と先島諸島の地震・津波

本論で扱う地域を限定するため、はじめに地理的概説を若干示したい。日本の南方は南西諸島、先島諸島など様々な地理学上の分類がなされるが、南西諸島とは九州南端から台湾東部での海域にある島嶼をさし、琉球弧ともよばれる。南西諸島は薩南諸島と琉球諸島とに分けられ、後者に沖縄諸島および先島諸島が含まれる。先島諸島は文字通り、日本の南端（先の方）に位置する場所であり、宮古列島、八重山列島（含尖閣諸島）から構成される。本論では南西諸島の中でも先島諸島、とくに宮古列島の宮古島界限（伊良部島、下地島、来間島、池間島等含）と、八重山諸島の石垣島界限（離島含）を中心に考察する。

次に先島諸島における近世以降の地震・津波に関してみる。琉球大学地震学研究室による沖縄の歴史地震リストから、宮古島と石垣島近辺が震源の近地津波¹に限定して抽出すると、1625年の石垣島の津波から1958年の石垣島での地震まで、合計17回の地震と津波被害があった²。この中でも最大の津波被害が出たのが、1771年に生じた明和大津波である。当時の被害記録や後の研究データによれば、以下の概要となる。

1771年（明和8年）旧暦3月10日午前8時頃、石垣島の東南沖で地震が発生、大津波が石垣島と宮古島、周辺島嶼に襲来した。推定マグニチュードは7.4、死者・行方不明者は全体で約12,000人にのぼり、このうち石垣島で最も被害が大きく、死者数は9,313人、宮古島では2,548人とされる³（牧野清 1981 [1968] : 80、112 / 伊藤和明 2011 : 130 / 石垣市教育委員会市史編集課編 1998 : 5）。とりわけ石垣島の北東部から南部までの東海岸が被害甚大であった。

この時代に被害数値が細かく記録されたのは、琉球王府における人頭税⁴の管理によるものと推察される。また、津波襲来時に南部で納税のため大勢の人々が、離島からも蔵元⁵に集まり、被害にあった。

津波に関しては琉球王府での管理下において被害状況の記録がなされており、『大波之時各村之形行書』の記録によれば、大地震の直後に東方で雷のような轟が聞こえた。その後、かなりの引き潮状態となり、波が徐々にまとまり、大津波が黒雲のように襲来した。津波は3度到来し、波高は最大でおよそ二十八丈⁶、沖の石が陸に打ち上がり、石垣島の北東から南東の12か村が大きな被害を受けた（Ibid. : 3 / 牧野 1981 [1968] : 296-297）。とりわけ仲与銘村のように集落全員が死亡したといわれる集落や、白保のように住民約1,500人のうち数十名しか生存しなかった深刻な被害の村もあった（石垣市教育委員会市史編集課編 1998 : 32-33.）。

津波被害は離島である黒島や新城島にも及び、平坦な新城島で住民のおよそ37%が津波で死亡し⁷、救済のために役人が派遣された。また、ほぼ壊滅した石垣島の東部集落を再興すべく、周辺離島から集団移住が進められた。

宮古島においても、下地島や伊良部島、宮古島の南部から東部に津波の被害が大きく、先述のように2,500人以上が津波で死亡した。とくに宮里、新里、砂川、友利の集落が重大な被害にあった。その後、生存者が標高の高い土地に村を再興したが、下地島は津波後に無人となった⁸。

なお、八重山の明和大津波とはこの津波の地元研究者である牧野清が世に知らしめた呼称で、今村明恒の論文「琉球地震帯並に明和大津波」から引用したものである(牧野 1981 [1968]: 83)。他に八重山地震津波、明和地震津波、明和津波、大波、乾隆大津波⁹などと様々によばれるが、牧野の呼称がほぼ一般化していることもあり、本論では1771年の八重山地方における地震津波を明和大津波とよぶことにする。

1-2 明和大津波をめぐる研究

先島諸島でも明和大津波に関する調査研究は多く、とりわけ石垣島の津波記念物の調査が顕著といえる。石垣島では南部にあった蔵元が波で流され、当時ここに納税のため集まった人々や役人が死亡した。この際、多くの文書や書簡も流されたが、生存した役人や記述を請け負った人々が琉球王府に知らせるため、被害状況を書状にした。これが『大波之時各村之形行書』や『大波寄揚候次第』である。古くから村に住む家に写本が残っており、たとえば喜舎場永詢家、豊川家、大浜道子家などが該当し、その他活字本や謄写本などが存在し、貴重な資料となっている。なお、先の古文書は石垣市総務部市史編集課¹⁰で石垣市叢書としてまとめられている。

牧野の『八重山の明和大津波』により、この大津波について広まったといっても過言ではない。先島諸島には郷土研究者としての地元出身の民俗学者が多く、牧野は喜舎場永詢に付き学び、石垣島の各所を丹念に調査、大津波に関する文献を上梓した(寺本潔・田本由美子 2015)。

牧野による著作は後の研究者の指標ともなったが、同時に後の反駁も生ぜしめた。とりわけ批判の矛先は波高が宮良村で最大の85.4mについてである(牧野 1981 [1968]: 121, 130)。この数値は先述の『大波之時各村之形行書』にある「潮揚高或式拾八丈」(石垣市総務部市史編集課編 1998: 3)、「宮良・白保地境嘉崎、潮上り戸高式拾八丈二尺」(Ibid: 28)を引用し、メートル換算したものであるが、津波工学の立場からこうした波高を疑問視し、津波考古学の調査に基づいてこの数値を誤りとし、宮良地区における推定遡上高は20~30m、ないしは約30mとする論が生じた(後藤和久・島袋綾野 2020: 62/今村文彦・吉田功・アンドリュームーア 2001: 347)。戸高を波高ではなく、遡上高とする説、あるいは波の上った地の標高とする説などがあり、先述のように現在の基準で丈尺計算する

ことへの疑問視、測量が当時戸板であったという説などが提示された。

また大津波が石垣島南部の内陸を横断したとする説に関しても、スリ山¹¹を乗り越えて名蔵湾に達したことを否定する論もあり、津波石に関しても明和大津波で移動したのではなく、過去の津波によるものだとする論もある。

こうした反駁、すなわち明和大津波で移動した津波石および波高、スリ山横断否定説に対して反証を唱えた調査研究もある(仲座栄三・渡久山諒・稲垣賢人 2015)。津波痕跡や地質調査などから2,000年間に7回、または400～600年に一度、5,000年に5～6回(都司嘉宣 2018:96)、2,000年間に一度など様々な津波襲来説が挙げられる。こうした科学的検証による反駁、牧野研究への再評価など、一連の論争を把握したうえで、分析考察を進めたい。

明和大津波に関する震源や津波の要因に関して、多数の研究者が調査を行うものの、未だに明確でない事項が多い。とくに津波発生の要因は海溝型津波説、海底地滑り説、巨大地震説、津波地震¹²説、断層運動説、断層ずれと海底地滑りの同時進行説などが挙げられる。とくに津波地震に関して言及されるのは、明和地震による人的・物的被害がほとんど報告・記載されていないこと、津波による大きな被害が目立つことなどである。よって明治三陸津波との比較が散見される。

さらに伝承や民俗的な論考も多数存在する。八重山諸島、宮古諸島ではそれぞれ津波に関する民話や神話などの民間伝承が多くみられる。井戸や御嶽にまつわるものもあれば、個人や神が主人公となるものもある。こうした民話を地元出身の民俗学者が収集するケースもある。とくに先島諸島では人魚と津波に関する伝承、珍魚(大魚)にまつわる伝承が多い。なお、人魚譚と津波伝承に関しては第3章に記す。

第2章 石垣島と宮古島の津波モニュメント

環境省生物多様性センターが示す江戸時代までの地震と津波のリストにおいて、沖縄以南での地震は1771年の明和の大津波が記載されるのみである¹³。小規模地震やそれに伴う津波を入れると若干増えるものの、南西諸島において記録上最大の津波は明和の大津波において他にみられない。

本章では津波にまつわる石や遺構、慰霊碑など物質文化としての津波記念物を津波モニュメントと称し、石垣島および宮古島の津波モニュメントを俯瞰する。津波モニュメントとは、目時和哉が三陸の津波に関して石碑だけでなく、様々な遺物や記念物をとらえて命名した「近代津波モニュメント」を、筆者が三陸および道南の津波にまつわる石や建造物、樹木などの記念物を分析考察する際に、「津波モニュメント」として援用した(目時和哉 2013:33/中村純子 2020:3)。

津波モニュメントは津波慰霊碑、記念石碑、津波石、津波到達ラインを示す道路や電柱・

建物壁の表示、看板、樹、漂着材を利用した家屋、墓、津波伝承にまつわる場所やものなど多岐にわたる。後世への継承のため、また横死など津波による死者への慰霊として重要な記念物であり、教訓的な意味を込めて設けられたものが多い。

石垣島では北東から南東岸にある5つの津波石をまとめた「石垣島東海岸の津波石群」が2013年に国指定の天然記念物に登録された。大浜の津波大石（資料1）、とふりやの高こるせ石（大浜）、伊野田の畑中にあるあまたりや潮荒（資料2）、平久保半島の安良大かね¹⁴、北東の伊原間海岸のバリ石である。



資料1 津波大石



資料2 あまたりや潮荒

なお、津波石とは津波によってもとの場所から波の威力で移動した石（岩）をさし、日本の各所でみられ、津波常襲地帯の三陸沿岸に散見される。南西諸島では海から移動した津波石において、ハマサンゴなどサンゴ岩が多くみられ（バリ石など）、貝等の化石痕やサンゴの成長年よる特長をもち、年代測定が可能である。



資料3 明和の津波石(登野城)



資料4 明和大津波遭難者慰霊之塔

石垣島ではこの他にも過去の津波でもたらされた大岩が海岸および川岸、陸地にあり、近年森の中にある津波石が発見された¹⁵。また公的に認定されていないが、登野城の蕎麦店の庭に明和大津波で沖から流されてきた津波石が置かれている（資料3参照）。ここで

は「明和の大津波石」と看板が設けられ、由来に関する説明文が別の木板に書かれている。

宮良地区の高台に1983年「明和大津波遭難者慰霊之塔」が建てられてた。標高約88mの場所に石門と慰霊の祭壇が置かれている（資料4）。門右脇には明和大津波の説明文が設置され、毎年旧暦の3月10日に該当する新暦の4月24日に慰霊祭が執り行われている。

その他に白保の真謝井戸、千人墓など津波にまつわる伝承をもつ対象が幾つかみられる。前者は白保から分村時に活用されたウリカー¹⁶であったが、明和大津波で埋まってしまい、後に発掘整備され、現在は市指定の史跡となっている。後者は白保の海岸段丘の洞穴で、津波後に大勢の遺骸を葬ったことから「千人」と称した。第二次世界大戦中にはほぼ破壊され、後に発見され住民等によって確認された。

石垣島では上記のように、津波モニュメントが白保、大浜などを含めて東海岸一带に散見され、範囲が広いことが特徴である。これは東海岸が甚大な津波被害であったことと一致し、一方で津波被害が少なかった西部の海岸にこうした津波モニュメントがほとんどみられない。石垣島では明和大津波遭難者慰霊祭が先の慰霊塔の前で毎年実施され、新暦4月24日は「市民防災の日」に指定され、防災・減災へこの「津波記憶」がモニュメント前で継承されている。

宮古島の津波モニュメントとしては、国の名勝である東平安名崎の津波石群（資料5）、名勝になっている下地島・伊良部島間の佐和田の浜にみられる津波石群（資料6）、宮古市の史跡である下地島の帯岩、与那覇前浜の乾隆三十六年大波碑、その他に明和大津波に流されたり、埋まったりしたという御嶽や井戸などが挙げられる。

乾隆三十六年大波碑は与那覇湾で現在景勝地となっている前浜の丘陵にある。この前浜には明和大津波による死者が流れ着いた場所であり、この丘陵地（通称前山）に埋葬されたと伝えられる。よって墓地付近の慰霊碑となる。宮古島ではここ以外に明和大津波の犠牲者を慰霊する石碑はない。また、この石碑は宮古市の文化財として史跡登録され、ホームページに掲載されているが、調査中に地元住民の幾人かに聞いたところ、宮古市総合博物館の職員以外に石碑は知られていない状況であった。



資料5 東平安名崎の津波石群



資料6 佐和田浜の津波石群

これに対して東平安名崎および佐和田の浜の津波石群は景勝地で島内観光名所ともなっているため、ガイドブックやサイトに掲載され、人々に知られる。東平安名崎は東端の岬で、国の史跡名勝・天然記念物に指定され、突端に灯台があり、東側に海中から高台にかけて無数の石がみられる。明和大津波によると伝えられた津波石群で、高台の1つに「マムヤ伝説」の岩が美女マムヤの墓とされており、観光名所となっている。佐和田の浜は下地島から伊良部島にかけて位置し、「佐和田の浜珊瑚礁・礁湖面」として市指定の天然記念物であり、津波石が海中に散乱している。干潮となると沖まで続く無数の津波石をみることができる。



資料7 下地島の帯岩

そして下地島にある帯岩は岩の中央がへこんでいる¹⁷ことから帯をしている人にたとえてオコスクビジー、オコースビジー、あるいはヌーマミージー¹⁸ともよばれる(資料7)。高さ12・5m、周囲およそ60mの世界最大級の津波石である。仲座等の調査によれば上下逆になっていること、約50m先に不自然に切り取られたような断崖

部分があること、付着化石の炭素年代測定¹⁹の結果から明和大津波で移動したと論じられた(仲座栄三・渡久山諒・稲垣賢人 2015:194-195)。なお、帯岩近くにかつて集落があったとされるが大津波で壊滅して以降、無人になったという伝承もあり、集落跡も発掘された(山本正昭・平良勝保・山田浩世 2013)。そして周辺にも過去に津波石があったが、その多くが下地島空港建設の際に破壊された。町の依頼でこの帯岩のみ保存され、後に航海安全、家内安全などの信仰地となり、鳥居が設けられている。

このほかに東南部マイパー浜のハマサンゴ岩塊群、下地島の通り池などが挙げられる。通り池は国の名勝天然記念物に指定されている2つの池で、「龍の目」ともいわれる。琉球石灰岩の鍾乳洞上部が陥没して出来たブルーホールであり、津波伝承があるため次章で述べる。ここは観光スポットであり、2つの池は下層部でつながっている。

総じて宮古島は東から南部、下地島と伊良部島の一部に津波モニュメントが集中し、石垣島同様、大津波の被害地域と重なる。石垣島との差異は津波石群の浜が観光名所となっていることであり、島内観光ツアーでも説明されることである。

津波モニュメントは戦跡と同様に「負の遺産」とみなされ、慰霊や歴史探訪、スタディツアーなど特殊な目的を除き、観光ではあまり歓迎されない傾向にある。いわゆる「ダークツーリズム」と称される類の観光形態に含まれよう。ただし観光で利用され、地域の歴史を観光者が知ることには、享乐的な面であれ、負の側面であれ、地域理解を深め、情緒を醸成することになると考える。また、普段の暮らしではあまり意識しない人々にも防災・減災を促し、様々な世代の訪問者に啓蒙する機会となる。さらには観光中に地震や津

波などの災害にあうおそれもあることから、観光者に現地の歴史や景勝地を示す際に、津波モニュメントを部分的にはめ込むこと、わかりやすく伝承と絡めることは今後、推進すべき観光のあり方といえよう。

ここで津波モニュメントの総合的な提示を担う事例として、博物館が挙げられる。

石垣島の八重山博物館ではエントランスの無料エリアに明和大津波や津波災害に関するパネルを設置し(資料8)、誰もが自由に見学できるようにしている。津波石、明和大津波の被害記録、文献資料などがわかりやすく展示されている。過去に明和大津波の特別展示をした経緯もあり、詳細なパネルであった。これは地元住民から観光者まで多くの訪問者にみせられる形式である。

また宮古市総合博物館では民俗展示室内に明和大津波の展示があり(資料9)、通常訪れるのがやや困難な与那覇の慰霊碑、帯岩、近年発見された古文書、被害記録や明和大津波に関して提示している。このほかに御嶽²⁰のジオラマ説明には津波で被害を受けた御嶽を示し、エントランスにあるスライド検索学習コーナーに津波モニュメントと津波被害が記されていて、わかりやすく観光でも利用しやすいため、多くの訪問者に史実や防災を知らしめる工夫がされている。



資料8 八重山博物館展示



資料9 宮古市総合博物館展示

第3章 津波や人魚にまつわる伝承分析

ここでは民話や神話、歌謡など、文字伝承および言い伝え等の口述伝承と津波の関係を内容分析する。先の津波モニュメントが有形文化であるのに対して、言い伝え等の伝承は無形文化にあたる。なお、文字文化において民話絵本のように絵画や文字が合わさった伝承も重要であり、近年では動画やSNSを利用したものなど、様々な形態がみられる。

石垣島・宮古島における口述伝承としては喜舎場永詢の古謡収集と研究のように歌謡の保存と研究が挙げられる。また、民話に関しては石垣市教育委員会市史編集課が収集し冊

子を地域別に出版している。そしてインターネットではおもに八重山や沖縄周辺の民話や神話などが公開されている。

先島諸島では津波の民話が多く、とくに石垣島・宮古島において顕著である。なお、民話とは一般に昔話と同義の民間伝承であり、奇想天外なものも含まれる。伝説と古からの言い伝えも含まれる。津波にまつわる民話と実際の被害が一致するという報告もあり(後藤明 2006)、津波被害を教訓として継承した結果と考えられる。

先島諸島に人魚譚が多い。とりわけ津波と人魚にまつわる民話が諸所にみかけられる。そこで津波と人魚に関係する伝承を分析することによって、先島諸島での津波によって象徴されるものが何かを見出したい。人魚とは半人半魚(人面魚体)で、想像上の海に棲む生物をさす。現在人魚といえばジュゴンやマナティをイメージしがちだが、こうした生物の生息しない地域や時代を鑑みるに、日本において人魚は妖怪の一部であり、アマビエ・アマビコや河童と同列に置かれるものであった。民間伝承中の人魚として、ジュゴンやマナティだけでなく、『山海経』由来のオオサンショウウオ、リュウグウノツカイ、イルカやアザラシなどの海獣に関して検討した研究もある(九頭見和夫 2009)。

以下、南西諸島で人魚とみなされるジュゴンに関して、人魚の特性を考察し、続いて人魚と津波の民話について分析する。

3-1 南西諸島におけるジュゴン

もともと人魚をジュゴンとイメージすることは、古来日本の本州界限にはなかったといえよう。西欧からの学問流入により、とくに江戸時代の蘭学と中国からの学問が融合し、上半身が女性で下半身が魚という西欧由来のイメージが浸透していったと考えられる。とりわけ人魚は女性とされることも上半身イメージであろう。ただし日本の北方ではステラカイギュウ²¹の化石が発見されており、これから述べる南方のジュゴンを考慮すると、人魚がジュゴンなどのカイギュウ目と全く重ならなかった訳ではないと思われる。

南西諸島にはかつてジュゴンが多く生息した。縄文遺跡から骨や加工品が発掘されている。とくに八重山諸島で明治時代後期から大正時代初期まで捕獲記録が多かったが、その後乱獲等により捕獲数が激減した(環境省 2006: 1)。現在、先島諸島ではわずかな目撃情報あるいは海藻の噛み跡が報告されるにとどまる。その他、遺骸の漂着、漁の網にかかった例を除き、過去のような生息域ではなくなっている。

ジュゴンは沖縄諸島および先島諸島では漁獲物であると同時に神聖な生物であった。ジュゴン(儒艮)はザン、ザンノイオ、ヨナタマ(ヨナイタマ)、ヨナマタ、アカンガイユ、海馬、海牛などとよばれ、漁の対象となってきた。しかし同時にジュゴンは神の乗物であり、海神の遣いと考えられた。縄文時代にジュゴンの骨は呪具に加工、利用された。宮古市総合博物館には住屋遺跡出土のジュゴンの骨加工品が展示されている(資料10)。また、新城島上地島の東御嶽、同島下地島の七門御嶽にジュゴンの骨が祀られるが²²、ジュゴン

は単なる漁獲物ではなく、航海安全を祈願する対象でもある。

ジュゴン^{ジュゴン}は琉球王府時代に人頭税の対象となり、新城島に限り御用物として納めることが義務付けられた。つまり新城島のみ税としてジュゴンを納めるため、漁を許されたことになる。神聖視されつつも、琉球王府では不老不死の妙薬として、または妊婦の良薬とみなされ、多くの人々が所望した。とりわけ琉球王府は中国からの使節として冊封使を首里

でもてなした際に、ジュゴン料理を提供した。そのため新城島では塩漬け肉や干し肉、皮を琉球王府に納めた。ただしこの段階では漁獲物（食料）としてのザン（ジュゴン）であり、人魚と同一視はされていない。むしろ美味な珍味という位置づけである。しかし肉が不老不死、妊産婦の滋養となるなどの特殊な意味をもつこと、海神の乗物・遣いなどの観念から、単なる肉や皮を食すのではない、いわゆる儀礼的な意味をもつようになったといえよう。

3-2 津波や人魚にまつわる伝承分析

次に津波と人魚譚に関わる民話、神話、歌謡などの伝承についてみる。先島諸島の伝承に関して収集し、この中から津波や人魚、ザン、その他海の生物に関わる伝承を抽出したのが資料11である。なお、民話には同じ地域の伝承でもバリエーションが多くみられ、これらも表に含めた。

資料11の1～7が石垣島の伝承で7以外は全て東海岸の民話である。しかも1から6は野原集落の人魚伝承のバリエーションであり、津波と人魚の伝承として最も知られるものである。主人公は若者、老人、追放されたグループ、漁師など様々であるが、大きな魚を釣り上げ、人魚が名乗り命乞いをする。海に戻す返礼に津波が来ることを知らせてくれたため、津波から生き延びたという筋であり、助命報恩譚に該当する。これは柳田国男の述べる「物言う魚」(柳田国男 2013 [1971]: 263-264) であり、地元の言葉を話す。ここで重要なのは人魚が「津波がくるので、すぐに山へ逃げるように」と避難の仕方（高台避難）を知らせているところであり、津波の教訓譚の役割を果たしている。

また、ここでは近隣の白保村にこの話を伝えたところ、一笑に付されたという筋があり、人魚の話を信じなかった村民が大勢亡くなったと展開しており、ここに白保村が津波で多大な被害を受けたことと重なる。白保村は明和天津波前に1,574人の住民がいたが、生存したのは28人といわれ、大半の住民が死亡した。この被害事実が生存者の話の中で、逃げなかった村民は人魚の話にとりあわなかった人々となり、横死の要因となっている。な



資料10 宮古市総合博物館展示

お、バリエーションによっては白保村を物語に含まないものもあり、白保村への配慮など助かった人々による津波伝承が変容した例といえる。7の川平に関しては琉球真珠(株)が設置した人魚の母子像が沿岸にある。この地域の伝承にも人魚は登場するが津波をもたらす存在ではなく、また川平周辺では明和大津波津波の被害はほぼない。ただし牧野は川平の近隣に「ザンドゥ」という地名があり、過去の大津波でザン(ジュゴン)が打ち上がったという伝承を記した(牧野 1981 [1968]:331)。

8から17の10件は宮古島と下地島の伝承であり、8は御嶽と大司による村建ての民話といえる。津波後に夫婦となって村を創設する物語は21の多良間島の神話と類似しており、神話と民話の伝播による相互作用がうかがえる。9~13は下地島通り池のヨナイタマ伝承のバリエーションである。いずれも若干異なるものの、次の通りである。昔、下地島に村があり、村民がある時ヨナタマ(ヨナイタマ、時にヨナマタとも記載有)を釣り上げ、食べようと半身を網であぶった。その夜、隣家の子供が伊良部島へ行くと泣き続け、困窮した母が外で何者かの会話を聞く。「ヨナタマよ、なぜ帰らないのか」「今、あぶられて食べられようとしていて帰れない。サイ(津波)をよこしてほしい」。恐ろしくなった母子は伊良部島へ逃げた。翌朝村に戻ると大津波で跡形もなくなっていた、あるいは家のあった場所に大穴があいており、これが通り池であるといった民話である。かなりのバリエーションがあり、ヨナイタマという珍魚ないしは人魚がおそらく親か主であろう海神と話すため、これも「物言う魚」に該当する(柳田国男 2013 [1971]:263-264)。

14と15は御嶽に関わるもので好善ミガガマ御嶽の伝承とよぶ。ある村の娘(好善)が琉球から来た男と婚姻し子をなすが、ある時「流人の子」と言ったために夫と子を失うことになった。これを恨み、あるいは嘆いたところ、津波が到来し全て流したという悲劇型の民話である。これは好善が恨んで津波をよんだというケースと、嘆いたところ理由は不明だが津波が到来したバリエーションがあり、御嶽の伝承ともなっている。

16から17は砂川地区の津波除け行事「ナーパイ」に関わる民話で、過去に大津波で両親を亡くしたサアネに竜宮の命でウマノアズが嫁ぎ、子に恵まれ幸せに暮らす、ウマノアズが竜宮に戻ることで、成人した子供等に「二度とサアネのように悲しい思いをしないよう」、津波除けの方法を伝え、大魚となって竜宮に戻るといった民話である。砂川地区では毎年4月に津波除けの儀礼「ナーパイ」を行っており、この儀礼にまつわる民話ともいえる。

「ナーパイ」のように津波除けの儀礼を実施する場所は宮古島でもこの地域だけであり、石垣島や周辺離島にもみられない。砂川の位置する南部から東部は宮古島で最も明和大津波の被害が大きかった地域であり、民話と儀礼の所以が把握できる。「ナーパイ」は縄張りを意味する儀礼で、御嶽に女性が籠って神歌を歌い、その後縄で括ったダディフ(木の棒)を地面にさすことで海と陸の境界とし、津波が陸に来ないように祈る。そして海岸ではクイチャー²³を奉納する。一方、男性は御嶽前で船を漕ぐ動作をする。女性の儀礼は結界

をつくることで波除けとし、男性の儀礼は模倣呪術に該当し、航海安全、五穀豊穰を祈る。

18は沖縄本島の古謝に古く伝わるもので、これも「物言う魚」と津波に該当する。19から24はおもに先島諸島の離島における伝承で、20と24がザン（ジュゴン）に関わる歌謡である。海亀と対語になるザンをまじえた、豊漁を祈る寿歌といえよう。19は人魚が津波をもたらす話であり、人魚が凶変をもたらすという物語である。21は兄妹始祖洪水神話の範疇にある津波と創世の神話であり、おそらく環太平洋に伝播する洪水神話、日本神話にもみられる兄妹始祖伝が混合する。

22はイルカのような生物（ピードゥ）が人魚と同様に語られる珍しい例である。ピードゥの肉を切りあぶったところ、海神とピードゥが会話して大波が到来するという物語で、ピードゥと地名由来を除けば9～13の通り池伝承と類似する。これも伝播の可能性が濃厚であり、通り池の垂形とすることができる。23はびな一しさばという大形のフカがあぶられ、会話し、その後津波が襲来、村は全滅したという民話である。さばは宮古島地方の古語でフカを意味し、ここでは巨大な鯨とされる。黒島も新城島と同様、石西礁湖にある離島で明和津波により多大な被害が出た島である。この伝承も通り池伝承の垂形といえるものであり、ヨナタマの部分がそれぞれ別の海洋生物に置換されている。そしてこれらも「物言う魚」であり、海神と深い関係にある生物を食べることで海神の怒りを買うという筋と津波への教訓が読み取れる。ここには海神の罰という津波への意味付けがなされており、南西諸島で海神の遣いとされるザン（ヨナタマ）すなわちジュゴンは人魚であり、人魚の肉（ジュゴンの肉）を食べることへのためらいが伏線に挙げられよう。

つまり人魚の肉（南西諸島ではザンやヨナタマの肉）を海神の乗物や遣いと知りつつも、食してしまうことへのアンビヴァレントな思いが、贖罪の念となって民話に取り込まれ、食した懲罰を海神から津波で受けるというものである。その逆に人魚を助けた場合は、御礼として災難を回避できるという展開になっている。どちらも人魚を信じない（山へ逃げろという警告に従わない）人々は罰の対象となり、最も津波被害の大きい地域（集落）にあてはめられる。魚という言葉は海洋に生息する生き物全体をさすもので、海洋哺乳類であるジュゴンやイルカ、クジラも同様に魚としている。

また、女性と災害への同等な畏れとも読みとれる。人魚か人間の女性が災禍をもたらす、吉凶を左右し、海難としての津波をもたらすという流れは、オナリ神²⁴、ノロやツカサ²⁵といった女性が宗教的に関連する地域だからこそ構築された民話であると思われる。池間島および伊良部島の佐良浜における竜宮の神に祈る浜の儀礼（ヒダガンニガイ／竜宮ニガイ）、そして御嶽での儀礼をみても、女性と超自然的力との関係がうかがえる。

歌謡においてもザンを漁する場面を歌うことで航海安全や漁の安全を祈るが、これも予祝等の呪術的な意味合いをもつものである。ジュゴンは動きが鈍いイメージであるが、記録では容易にとれない珍しい漁獲物であり、大きさゆえに漁で捕える際に命を落とす漁師もいたほど、危険な漁でもあった。とりわけ新城島のみザンを御用物として琉球王府に納

No	島	対象地	人魚他	津波	明和	言	媒体	出	追記
1	石垣	野原	○大魚	○明日	△早朝	○	民話	8	白保
2	石垣	野原崎	○	○近々		○	民話	7	
3	石垣	野原村	○半身半魚	○明日	○3度	○	民話	28	白保
4	石垣	野原村	○大魚	○明日	○干潮	○	民話	5	白保
5	石垣	白保村	○海の遣い	○明朝	○	○	民話	2	塩漬・汁
6	石垣	トゥ里	○珍魚	○	○	○	民話	46	桃里
7	石垣	川平	○			○	民話	39	真珠
8	宮古	あまれ村		○			民話	24	村建 大司
9	下地	下地村	ヨナイタマ	○サイ		○	民話	35	人面魚体
10	下地	通り池	ヨナタマ	○	○3波	○	民話	77	ガイド語り
11	下地	通り池	ユナイマタ	○	○3波	○	民話	43	轟音 穴
12	下地	通り池	ユナイタマ	○3波		○	民話	44	ジュゴン
13	下地	下地村	○人面魚体 ヨナタマ	○		○	民話	42	
14	宮古	嘉手苧村		○洪浪			民話	4	普門好善
15	宮古	嘉手苧村		○			民話	24	好善 ^{ミカガマ}
16	宮古	砂川	竜宮女神 大魚で帰る	○過去			民話	38	ナーパイ 儀礼
17	宮古	砂川村 上比屋	竜宮天女 大魚	○過去			民話	43	ウマノアズ ナーパイ
18	沖縄	古謝	霊魚	○		○	民話	23	塩焼男
19	波照間		○	○戻る		○	民話	28	島行所望
20	竹富		○ザン				歌謡	47	ユングトゥ
21	多良間			○			神話	25	兄妹始祖
22	西表		○ピードゥ	○大波		○	民話	15	イルカ?
23	黒島	山崎村	びな一しさ ば	○		○	民話	15	フカ(鮫)
24	新城		ザン				歌謡	29	ザントカ ^{ルジラハ}

資料11 先島諸島の津波や人魚等まつわる伝承(筆者作成)

*No.18のみ先島諸島ではなく沖縄本島

*言=「物言う魚」

*出=出典。本論の引用参考文献および参考資料の番号参照

めていたことから、歌として継承される経緯がわかる。そしてイルカやクジラ、鯨や鯖でもなく、ジュゴンの人魚と同一視することに関しては、次章で考察する。

第4章 津波の象徴性と伝承の可能性

津波は破壊的な力で全てのものを流し去る。こうした自然の威力を琉球海溝に近い南西諸島に住む人々は代々経験し、津波に畏怖の念を抱いてきたと推察される。この章では津波の象徴と先島諸島の世界観を前半で考察する。つまり津波のシンボルとなる事象が先島諸島では何かについて考える。そして後半では伝承の可能性について、現代における津波伝承活動に関して述べる。

4-1 津波の象徴

まず象徴性とは代替機能であり、ある事象を別のものが代わりに示すことである。たとえば平和を示すのに鳩やハートマークなどを利用するのは、平和という意味内容を動物や事象、ロゴなどで代替する。この代替するものでもって、穏やかでやさしく、あたたかい状況などがイメージされよう。代替するものは類推される事象や意味合いをつなげるための媒介機能でもあり、象徴性（シンボリズム）ともいえる。

津波という厄災が何を介してシンボライズされるかを考察すると、先島諸島の伝承において人魚が津波災害を左右する媒介となっていることがわかる。人魚は民話伝承にみるように厄災をもたらすこともあれば（食すことへの報復譚）、助命してくれた人には津波の予告をして生存を助けることもある（報恩譚）。

先述のようにザン（ジュゴン）が直接リンクせずに津波と人魚はつながる。海神が引き起こすのが津波であり、人魚は海神の子か遣いなど関係の深い存在であろう。人魚が海の吉凶をもたらす、怪異をもたらすとおそれられたのも、こうした海神とのつながりであろう。

南西諸島、とくに宮古諸島では竜宮伝承が多くみられ、海神との関わりを考えるうえで重要な役割を担う。宮古島は浦島太郎説話と似た伝承のバリエーションが多い。来間島には竜宮城展望台があり、観光名所となっている。また、一部の地域では3-2に記したように、ヒダガンニガイ（浜神願い）という竜神への儀礼もみられる。

南西諸島の民話をみると、マサリヤ伝承、加那の桑の杖、エイ女房（魚女房）、砂川のウマノアズ（ナーパイ伝承）など、竜宮にまつわる伝承が多い。これは海底異界を示すものであり、パナリヤやニライカナイともつながる観念である。海の桃源郷でもある先祖霊と神々のニライカナイ、海の彼方から豊穡や福をもたらす来訪神、西方浄土思想などは天上異界または海上異界であるが、竜宮城のような海底異界にも桃源郷はあると信じられてきた証である。ここでは竜宮の乙姫および人魚は海神の娘か、あるいは縁の深い関係にある

存在であり、両者は民話の役割でほぼ同格といえる。

また瑠璃の壺の民話のように青は海、海の世界を示す色であり、海底異界は死者と海神、神々の世界でもある。陸に住む人は「ナーパイ」の儀礼のように、海と陸の境界を厳密にすることで、海の難を避けようとする。ここでは桃源郷としての竜宮城とともに、恐ろしい厄災もまた海からもたらされることを示している。たとえば海から来た船を助けたところ、自分の島に疫病や風邪をもたらす厄病神の船であったという民話がかつてこれを示している。

人々は石敢當と同様に縄張り、道切りなどで厄災を自分の環境（ナワバリ）に入れないよう儀礼や呪術的行為をし、それでも入ってくる厄災である津波を「ナーパイ」や様々な儀礼によって結界を敷くことで、避けようとする。いわば鳥居や注連縄と同じ境界機能をつくることを意味する。

人魚譚は津波生存者により防災・減災の意味が込められた内容になっており、戒めを後世に継承できるよう、そして子供にもわかりやすいように、海神とこの世をつなぐ人魚を入れることで教訓を構築していったとも考えられる。明和と津波は歴史的記録上、甚大な被害が出た先島諸島の津波である。人魚は海神や竜宮がシンボライズされたものであり、津波をもたらす、または津波を知る超越した存在でもある。海神と人間を媒介する、彼岸と此岸をつなぐ象徴でもあり、これが次第にザン（ジュゴン）とつながっていったといえる。

ジュゴンはかつて先島諸島に多く生息していたうえ、縄文時代から呪具に使われるなど肉も骨も利用されてきた。不老不死の薬になる、海神の乗物あるいは遣いと考えられた生物であり、同じく海神の乗物でもある海亀では代替できない存在のようだ²⁶。イルカやクジラ、アザラシのような海獣では代替性がなく、このような神聖性もあまりないといえよう。

こうした海神の子かしもべとされる神聖な生物を食すことには、かなりおそれや贖罪の念がともなったはずであり、漁獲物としての希少性もあり、人魚を介して津波を想起させる存在になったといえよう。こうして海神や津波を象徴する存在が人魚であり、南西諸島ではザン、ヨナタマとなったのではないだろうか。柳田はヨナタマに関して、ヨナは古語で海を表すので、海（ヨナ）と魂（タマ）から海霊=海の神であると述べた（Ibid.: 264）。こうした海の霊的存在は人知を超える威力をもち、災害を左右する存在でもあり、畏敬の念でもって異界からの生物としてとらえられた。津波は洪水とほぼ同義で創世神話にも広くみられるが、津波伝承の多様性、複雑性にも関わる。

4-2 伝承の可能性

津波伝承は第3章の津波モニュメントに代表される有形文化から4-1でみた民話や神話、歌謡、儀礼などの無形文化まで多岐にわたる。ここでは津波伝承が新たな可能性をもつことをみる。

津波は災害であるゆえに、観光などでは利用されにくい。「負の遺産」「暗い歴史」といったイメージがあり、戦跡や事故・事件跡のようなニュアンスが伴ってしまう。歴史や防災の学習目的であれば観光に組み込まれることから、津波伝承ツアーは有効である。しかし参加者が少数となる可能性もあり、より大勢の人々に津波伝承をするには困難が伴う。



資料12 人魚の涙CD絵本

津波伝承の可能性は無形文化にもみられる。歌と絵本による津波伝承で、CD絵本『人魚の涙』が挙げられる。これは石垣島出身のシンガーソングライターである前花雄介氏による作品で、石垣島東海岸の人魚と津波の伝承を歌にしたものである。前花氏は地元には伝わる津波の民話を知らしめようと私家版でCD絵本を出版した(資料12)。沖縄出身のイラストレーターである pokke104氏が石垣島の子供達と描いた人魚物語が絵本となっている。2012年石垣島

のリゾートホテルの音楽イベントに併催されたワークショップで描かれた絵がコラージュされた絵本である。「やがて大きな波がこの島を飲み込むでしょう どうか逃げてください」という歌詞を入れ、現代的手法と伝統を織り交ぜた旋律に、ギターと三線といった楽器で曲が構成されている。

前花氏によれば東日本大震災後、津波に関するこの歌を封印してきたが、先祖が大津波を生きのびた証であるにとらえ、再びライブ活動を展開した²⁷。この他にも前花氏は島に伝わる民話や、戦争マラリアなどの史実を歌にして公開し、地元の伝承に寄与している。

また、市町村など公的機関による民話の収集・編纂は公共の文化的遺産になるゆえに重要である。石垣市では教育委員会市史編集課で各地域の民話を収集し、地方の古語と現代語訳を入れたものをシリーズ化して発行している。これは郷土史として重要な民話コレクションであり、既に白保、平得など南東部の民話集が発行されており、子供から大人まで読めるように工夫されている。市史だけでなく、民話や民間伝承を収集することは、過去の歴史を知る語り部が高齢化し、失われつつある口述伝承の中で重要な課題である。

さらに津波伝承による村おこしが石垣島の星野地区で実践されている。星野地区はかつての野原地区に近い人魚伝承ゆかりの地で、伝承を地域住民が活用している。星野共同売店では離れのトイレ上に人魚像を置いたところ(資料13)、観光者の話題になり、これを目当てに観光者が訪問すると店員が話した。2005年から人魚の里「星野夏祭り」を開催し、人魚伝説で星野集落を知らしめるイベントを実施している。コロナ前には1,000人以上の訪問者でにぎわった。2012年に前花氏が歌い、2019年には子供達により「大津波から村を救った人魚」伝説が披露された²⁸。



資料13 星野共同売店



資料14 人魚の里

星野地区には共同売店の他に人魚の里（資料14）という喫茶店があり、店内にオーナーの親族が描いた人魚の絵画が飾られ、星野の人魚伝承の概要を記した紙が貼られていた。人魚が津波から集落の人々を救うといった民話は、人魚＝凶（津波などの厄災）をもたらし存在というマイナスイメージを払拭する村おこし要素となっている。

そして宮古島でも観光にて津波伝承を行っている。Lea Lea Trip 宮古島1日ツアーでは名所巡りの中で、東平安名崎の津波石群と明和の津波について、およびマムヤ伝説が、佐和田の津波石群に関してもガイドから解説があり、下地島の通り池では人魚と津波伝説が語られた。ツアーで大勢の参加者に地域の歴史としての津波と津波にまつわる伝承が語られることは意義深い。

このように新たな津波伝承の可能性は多方面へと徐々に展開している。

おわりに

以上のように津波伝承は象徴されるものを介して実践されている。津波は人々にとって疫病や他災害と同じ厄災の範疇にある。また津波は全てを洗い流すことから、海神の仕業と畏怖されてきた。先島諸島の津波伝承は海の生物や海神、怪魚、人魚にまつわるものが多く、伝承の対象地域は津波被害が甚大な地域である。

津波を生き延びた人々によって津波の物語は構築され、さらなる災害を乗り越えると再構築される。また、周辺の被害地域にも伝承や警告は伝播し、様々なバリエーションが伝播の過程で生じた。宮古島では竜宮伝説や浦島伝説と混在する形の、人魚と津波にまつわる伝承があり、石垣島では被害が最も大きかった伊野田地区における野原の伝承に集中する。人魚はおもに漁労を生業とする人々にとって、海神の子や遣いなどとして畏敬の念で受け止められ、あるいは津波等凶事をよぶ存在として畏れられた。これらは人魚が想像上の生き物、怪異に関わるものと警戒される一方で、食料という民話内のアンビヴァレント

な状況が要因となることが明らかになった。

南西諸島ではジュゴン漁が過去からみられ、縄文時代には骨製品が呪具として利用され、琉球王府時代には不老不死の薬、冊封使の饗宴に珍重された。ジュゴンはザン、ヨナタマなどとよばれ、海神の乗物ないしは遣いとされた。このように食料でありながら、神聖視される海棲生物は他にない。こうしたジレンマは様々な民話に残り、伝承の要になっている。

人魚は想像上の動物だが、江戸時代から明治時代初期にかけて日本は人魚のミイラと称するものを製造しては海外に輸出していた。おもにサルの頭と魚の下半身を縫合したもので、後に寺社に安置された。こうした背景もあり、人魚は想像上にもかかわらず、実在のジュゴン（ザン）と結びついた。つまり実在の生物と想像上の存在が合わさり、津波伝承の象徴性を保持するに至った。背景として海神、竜宮といった世界観、すなわち海底異界が延長線上にあり、津波を操作する超越的存在が想定される。他方に人がいて畏敬の念を抱く。この媒介として人魚があり、津波の予知や警告、報復、恩返しなどをする。先島諸島の津波伝承では人魚や怪魚が象徴的な存在であり、教訓的な警告をしてくれる。津波と人魚がセットになっているように、海の神を媒介する「物言う魚」として示される。

今後、津波伝承が地域住民と訪問者の双方にとって意義深く、防災・減災の意識づけになり、遊興面でも危機管理ができるよう観光人類学研究の立場から援護しつつ、さらなる考察をしていきたい。

謝辞

この論文は2022年度に採択された横浜商科大学研究助成「南西諸島における大津波伝承と象徴の研究」による助成金を受け、石垣島・宮古島調査、文献調査などの研究を行った。

また、石垣島調査にあたり、前花雄介氏、前花雄二氏、石垣市教育委員会市史編集課・仲程玲氏、R's café、先島交通・久高氏、八重山博物館、星野共同売店、「人魚の里」、そして宮古島調査にあたり、宮古島市総合博物館、熱帯植物園In and out、中央交通・高橋晴子氏に協力いただいた。

ここに記して謝辞としたい。

註

- ¹ 日本沿岸600km以内で発生した地震等による津波。
- ² 琉球大学地震学（中村衛）研究室「沖縄の歴史地震」年表（1625～1966年）より計上。
<https://seis.sci.u-ryukyu.ac.jp/hazard/large-eq/history.html>
- ³ 記録により、とりわけ石垣島での死者数が異なる。『波之時各村之形行書』と『球陽』

- の死者数がおよそ80人は異なるが、本論では前者の記録に基づき、9,313人とした。
- 4 個人に頭割りで課す租税。沖縄では起源が不明だが、1609年薩摩藩侵入後の人口調査、年齢、村の状況から段階制の賦課制度が編み出された。ここでは琉球王府が宮古諸島、八重山諸島に課した税をさし、1637～1902年に実施されたが、他地域より過酷を極め、男性は粟等の穀類か労役、女性は上布の納税を強いられた。
- 5 原義は納税物を保管する場所だが、転じて琉球王府の行政庁、つまり役所の意味で用いられる。
- 6 1丈 = 3.0303mで換算すると、およそ84.85mとなる。牧野は文献中で85.4米としている。なお、琉球王府での度量衡換算が中国由来で異なるため、遡上高が別になるとの論もある（石垣市総務部市史編集課編 1998：解題）。
- 7 石西礁湖の他の島々はほとんど津波被害がなく、サンゴ礁は天然の防波堤の役割をしたといわれる。ただし石西礁湖の端に位置し、より震源に近かった黒島と新城島で被害が大きかった。
- 8 この他に周辺の多良間島、水納島では大きな被害が生じた。
- 9 琉球王府が当時関係していた中国の暦に基づく、乾隆36年となる。
- 10 現在は石垣市教育委員会市史編集課となっている。
- 11 牧野の文献では茶山周辺をさす（牧野 1981 [1968]：92）。津波が山をすり切ったため、「スリ山」と名付けられたとされる。
- 12 地震の規模（震度含）が小さいにもかかわらず、大きな津波を引き起こす地震をさす。例として明治三陸津波が該当する。ぬるぬる地震ともよばれる。
- 13 環境省生物多様性センター 「日本の主な地震災害一覧（近世以降）」 <https://www.biodic.go.jp/biodiversity/activity/policy/kyosei/23-1/files/3-1-2.pdf>
- 14 現地では通称、イファンガニともよばれる。
- 15 日本経済新聞 「石垣島に [津波石]、河口上流500メートルで発見」(2022年7月27日 社会・調査 日経電子版) <https://www.nikkei.com/article/DGXZQOUF270KB0X20C22A7000000/>
- 16 人が内部に降りていく形式の井戸。
- 17 サンゴ岩が海で発達する際、波の浸食によりできた凹みで、ノッチとよぶ。
- 18 馬の番をする岩の意味。
- 19 放射性同位元素（ラジオアイソトープ）として炭素を用いた年代測定法。放射性同位体の炭素14の半減期5,730年を利用して測定する。考古遺物の科学測定に利用される。この場合、津波石がハマサンゴ等のサンゴ岩のため測定可能。
- 20 南西諸島の聖地をさす。集落の守護神や祖霊神が祀られるなどの聖なる場所であり、神職の女性（ツカサ／ノロなど）が儀礼を執り行う。ウタキ、ワン、オン、ウガン（オガン）などともよばれる。

- 21 過去に絶滅したジュゴンの一種。カイギュウ目にジュゴン科とマナティ科があり、前者の下位分類として1700年代に絶滅したステラーカイギュウと現在生息するジュゴンがみられる。前者はヒトによる乱獲で絶滅したが、かつて日本の北部でも生息したことが化石発掘から明らかになった。
- 22 新城島はツアー参加など、島民による上陸許可がないと入島できない。また、島の御嶽は外部者の立入り、撮影、祈願さえも禁じられている。
- 23 宮古島各地にみられる民俗芸能で集団舞踊。豊年祭、雨乞い、娯楽、人々の心境など様々な場面で踊られる。声(クイ)を合わせる(チャース)の意味があるといわれる。
- 24 南西諸島でみられる、姉妹(オナリ、ウナリ)による兄弟を守護するという信仰。おもな祭祀は女性が執り行う。
- 25 祝女。琉球神道における女性祭祀で、御嶽で儀礼を行うなどする。オナリ信仰では最高位の神女といえる。沖縄本島等ではノロ、先島諸島ではツカサなどとよぶ。
- 26 山陰地方の八百比丘尼伝承が挙げられる。人魚(不思議な魚)を食した女性は何百年も生きた民話から、人魚の肉は不老不死の効能があるとされたことがうかがえる(柳田国男 1969:227、235-238)。
- 27 ・前花雄介/人魚の涙@沖縄そば ゆんたく(神奈川・川崎)
<https://www.youtube.com/watch?v=hB9lDpgNx4>
- 28 ・石垣経済新聞 2011年8月25日
<https://ishigaki.keizai.biz/headline/775/>
・石垣島 人魚の里 星野 <http://ningyonosato.isigaki.info/>
・石垣経済新聞 2012年7月19日 「[人魚の里] 星野集落で夏まつり—地域挙げて手作りイベント—(第8回) <https://ishigaki.keizai.biz/headline/1007/>
・やいまタイム・やいまニュース 2019年7月21日「15回目の人魚の里[星野夏まつり] <https://yaimatime.com/yaimanews/79469/>

引用参考文献

- 1 秋道智彌 「海の恩恵と災禍を考える—文治地震・明和津波・東日本大震災にふれて—」『年報人類学研究 第6号』 2016 pp.1-16.
- 2 後藤明 「神話に残る津波の記憶」『Ocean Newsletter第153号』 笹川平和財団海洋政策研究所 2006
https://www.spf.org/opri/newsletter/153_1.html
- 3 後藤和久・島袋綾野編 『最新科学が明かす明和と大津波』 南山舎 2020
- 4 平良勝保 「普門好善の伝承と津波、その年代の検討(覚書)」沖縄科学防災環境学会論文集『防災と環境』 2022 pp.71-74.

- <https://u-ryukyu.repo.nii.ac.jp> (琉球大学学術リポジトリ)
- 5 伊波南哲編 『沖縄の民話 (新版日本の民話11)』 未来社 2015 (1958)
 - 6 石垣市総務部市史編集課編 『大波之時各村之形行書・大波寄揚候次第』(石垣市史叢書12) 石垣市 1998
 - 7 石垣市教育委員会市史編集課編 『平得の民話』 石垣市 2018
 - 8 石垣市教育委員会市史編集課編 『白保の民話2』 石垣市 2018
 - 9 今村文彦・吉田功・アンドリュームーア「沖縄県石垣島における1771年明和大津波と津波石移動の数値解析」『海岸工学論文集48』 2001 pp.346-350.
 - 10 伊藤和明 『日本の津波災害』 岩波書店 2011
 - 11 神谷敏郎 『人魚の博物誌』 思索社 1989
 - 12 九頭見和夫 「[人魚]の実像孝」『人間発達文化学類論集第10号』 2009 pp.81-96.
 - 13 前花雄介・pokke104・島の子ども達 『人魚の涙』(CD絵本) 私家版 2012
 - 14 前花哲雄 『八重山の歴史と民話』 私家版 1988
 - 15 牧野清 『改訂増補 八重山の明和大津波』 私家版 1981 (1968)
 - 16 目時和哉 「石に刻まれた明治29年・昭和8年の三陸沖地震津波」『岩手県立博物館研究報告第30号』 2013 pp.35-45.
 - 17 宮崎裕司 『民話が語る自然科学』 慶應義塾大学出版会 2009
 - 18 中丸禎子 「博物学の人魚表象」『比較文学』 2016 pp.7-23.
 - 19 中村純子 「津波モニュメントにみる伝承と観光利用の状況分析―一道南および三陸を中心に―」『横浜商大論集第53巻第2号』 2020 pp.1-18.
 - 20 仲若直子 『真珠伝説 かなん』 2002 ニライ社
 - 21 仲座栄三・渡久山諒・稲垣賢人「南西諸島における津波石の起源と発生メカニズムに関する研究」 土木学会論文集B2 『海岸工学』 vol.71No.2 2015 pp.I-193-I-198.
 - 22 仲座栄三 「牧野清『八重山の明和大津波』と大浜崎原の[津波大石]について」 2020
 - 23 佐喜眞興英 『南島説話』 郷土研究社 1922
 - 24 下地和宏 「あまれ村と伝説の津波について」『宮古島総合博物館紀要11』 2007 pp.1-12.
 - 25 曾我部一行 「兄妹始祖神話再考―生れ出ずるものを中心として―」 成城大学大学院 『常民文化 (30)』 2007 pp.1-31.
 - 26 杉本信夫 「新城島(上地島)の古謡」 沖縄国際大学学術成果リポジトリ pp.25-71.
 - 27 砂川玄正 「近世時代後期における宮古の自然災害」『宮古島市総合博物館紀要1』 1994 pp.1-53.
 - 28 竹原孫恭 『ばがー島 八重山の民話』 大同デザインセンター 1978
 - 29 竹富町史編集委員会編 『竹富町史第5巻 新城島』 竹富町 2013

- 30 寺本潔・田本由美子 「明和大津波研究家 牧野清の研究スタイルとその今日的意義」『論叢 玉川大学教育学部紀要』 2015 pp.115-132.
- 31 都司嘉宣・深田地質研究所 「津波研究上に生じた10個の謎」『深田地質研究所年報』 No.19. 2018 pp.81-103.
- 32 植松明石 『沖繩新城島民俗誌 ―[パナリ] その光と影―』 岩田書院 2017
- 33 山本正昭・平良勝保・山田浩世 「伊良部・下地島キドマリ村跡調査成果報告」『2011年度トヨタ財団研究助成採択プログラム 沖繩・奄美島嶼社会における行政防災施策・制度・システムの歴史の変遷に関する包括的研究成果報告書』 Vol.6 2013 pp.21-37
- 34 柳田国男 (著)、関敬吾・大藤時彦編 『増補 山島民譚集』 平凡社 1969
- 35 柳田国男 『一目小僧その他』 角川書店 2013 (1971)；初出1932
- 36 『八重山に伝わる民話 その1』 NPO法人沖繩伝承資料センター 2010

参考資料

- 38 エグチホールディングス石垣島「石垣島の人魚伝説！」
<https://eguchi-hd.co.jp/resolabo-ishigaki-mermaid/>
- 39 石垣島PR情報局「人魚伝説が関係する自然災害！」
<https://ishigaki-pr.com/meiwanootsunami/>
- 40 石垣市「明和大津波」から考えよう (2021年11月5日)
<https://www.city.ishigaki.okinawa.jp/soshiki/1/2/6821.html>
- 41 環境省 「ジュゴンと藻場の広域的調査 (平成13年～17年度結果概要) 2006
<https://www.env.go.jp/press/7864.html>
- 42 宮古共栄バス 伊良部・下地島「漁師の町伝説の島」
<https://385kyoei.com/about-miyakojima/irabu-shimoji.php>
- 43 宮古島キッズネット
<https://www.miyakojima-kidsnet.org/R-densetsu.html>
- 44 宮古島ツアーズ 「ユナイタマ伝説」
<https://miyako-tour.com/spot/toori-pond>
- 45 沖繩県文化環境部自然保護課 「ジュゴンのはなし 沖繩のジュゴン (第2版)」
https://www.pref.okinawa.jp/site/kankyo/shizen/hogo/documents/the_story_of_the_dugong_.pdf
- 46 沖繩県立博物館・美術館 webアーカイブ ウチナー民話のへや「人魚と津波」
<https://okimu.jp/museum/minwa/1582420134/>
- 47 竹富町ウェブログ 「竹富町の古謡と歴史を訪ねて」 2006年1月19日
https://www.taketomijima.jp/blog/archives/2006_01.html